

第65回名古屋春栄会  
演目のあらまし

令和5年1月15日

名古屋春栄会事務局

## 目 次

翁（おきな）	1
老松（おいまつ）	2
熊野（ゆや）	3
猩々（しょうじょう）	4
清経（きよつね）	5
室君（むろぎみ）	6
桜川（さくらがわ）	7
紅葉狩（もみじがり）	8
淡路（あわじ）	9
西行桜（さいぎょうざくら）	10
竜田（たつた）	11
錦木（にしきぎ）	12
岩船（いわふね）	13
小袖曾我（こそでそが）	14
〔能のミ二知識〕	15

このリーフレットは、第65回名古屋春栄会の演目を解説したものです。

演目の記載順は、番組の順です。

詞章については、金春流の謡本から転載しました。

## 翁（おきな）

---

【作 者】 不詳

【登場人物】 シテ：翁（面・翁）、狂言：千歳、狂言：三番叟

【概要】（素謡の部分…シテが退場するところまで）

翁は「能にして能にあらず」と言われています。演劇性を持たない、天下泰平、国土安全、五穀豊穰を祈願する儀式としての舞のみの能です。翁、千歳、三番叟の3人がそれぞれ別に舞を舞います。颯爽たる千歳の舞、荘重な翁の舞と続き、その後、翁は退場し、千歳と三番叟の問答の後、三番叟が「揉之段」と「鈴之段」という2つの力強い舞を舞います。

【詞章】

シテ どうどうたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

シテ 所千代までおわしませ。

地謡 われらも千秋さむらおう。

シテ 鶴と亀との齡にて。

地謡 幸ひ心にまかせたり。

シテ どうどうたたりたたりら。

地謡 ちりやたたりたたりら。たたりらりらりらりどう。

千才 鳴るは瀧の水。鳴るは瀧の水。日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

千才 たえずとうたり。たえずとうたり。

<千才舞>

千才 所千代までおわしませ。われらも千秋さむらおう。鳴るは瀧の水。

日は照るとも。

地謡 たえずとうたり。ありうどうどう。

<千才舞>

シテ あげまきやとんどや。

地謡 よばかりやとんどや。

シテ ざしていたれども。

地謡 まいろうれんげじや。とんどや。

シテ 千早ふる。神のひこさの昔より。ひさしかれとぞよわい。

地謡 そよやりちや。とんどや。

シテ 千年の鶴は。万才楽と歌うたり。又万代の池の亀は。甲に三極を備えり。

天下泰平国土安穩。今日のご祈祷なり。ありわらや。なじよの翁ども。

地謡 あれはなじよの翁ども。そやいづくの。翁ども。

シテ そよや。

<翁舞>

シテ 千秋万才の。喜びの舞なれば。一舞まおう万才楽。

地謡 万才楽。

シテ 万才楽。

地謡 万才楽。

## 老松（おいまつ）

---

【分類】初番目物（脇能＝老神物） \*真ノ序ノ舞

【主人公】前シテ：老人（面・小尉）、後シテ：老松の神（面・石王尉）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（仕舞の部分...下線部）

都の西の方に住む梅津の某は、北野天満宮の夢のお告げを蒙り、筑紫国（福岡県）の安楽寺へ参詣することにします。はるばると旅をして、菅原道真の菩提寺である安楽寺へ着くと、老人と若い男がやって来て、梅と桜のことを述べ、花盛りの梅に垣を作ります。梅津の某は、彼等に言葉をかけ、有名な飛梅はどれかと問うと、神木であるから紅梅殿と崇めなさいとたしなめられ、同じく神木である老松についても教えられます。さらに梅津の某の頼みで、社殿の周辺の景色を述べ、松や梅が天神の末社として栄えていることを示し、中国では、梅は文学を好むので「好文木」といわれ、松は秦の始皇帝の雨やどりを助けたので「大夫」の位を授けられた故事などを教えたあと、神隠れします。

<中入>

おどろいた梅津の某は、供の者に土地の人を呼びにやらせ、その人から詳しく道真の事蹟や道真を慕って飛んできた梅、後を追ってきた松の話を聞きます。里人の勧めで梅津の某の一行は、松陰で旅寝をして神のお告げを待ちます。すると、老松の神霊が、紅梅殿に呼びかけながら登場し、のどかな春を祝って舞を舞い、君の長寿を祝い、御代の永遠をことほぎます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

さす枝の。さす枝の。梢は若木の花の袖。これは老木の神松の。これは老木の神松の。千代に八千代に。さざれ石の。巖となりて。苔のむすまで。苔のむすまで。松竹。鶴亀の。齡をさずくるこの君の。ゆくすえ守れと我が神託の。告を知らする。松風も梅も。久しき春こそ。めでたけれ。

## 熊野（ゆや）

---

【分 類】三番目物（現在鬘物） \*中之舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：熊野（面・小面）

【あらすじ】（今回の仕舞[クセ]の部分…下線部）

平宗盛は遠江国（静岡県）池田の長の熊野を愛妾として都に留めています。その熊野が故郷に残している老母が病気となり、熊野の帰国を促す手紙を侍女の朝顔がたずさえて都に上って来ます。心弱くなっている母の様子に熊野は宗盛のもとに行き、その手紙を見せて暇を乞うことにします。熊野は宗盛の邸に行き、母の手紙を読み上げて、今一度母に会いたいと帰国を願いますが許されません。宗盛はかえって熊野の心を引き立てようと花見の供を命じ、牛車に乗って一緒に清水寺に向かいます。都大路の春景色にひきかえ、車中の熊野はひたすら母を案じており、清水に着いて車を降りると、まず観世音に母の命を折ります。やがて花の下で酒宴が始まり、熊野は宗盛の勧めで、心ならずも興を添えるためにあたりの風物を眺めながら舞いを舞い、花の美しさをたたえます。ところが舞の途中でにわかにかみ雨が降り出し、花を散らします。熊野は舞をやめ、「いかにせん都の春も惜しけれど、馴れし東の花や散るらん」と歌を詠み、それを短冊にしたためて宗盛に差し出します。その歌を見た宗盛は、熊野の心を哀れに思い、東国に帰ることを許します。熊野は喜び、これも観世音のおかげと感謝し、宗盛の気持ちの変わらぬうちにと、その場から故郷に旅立ちます。

【詞章】（今回の仕舞[クセ]の部分の抜粋）

寺は桂の橋柱。立ち出でて峰の雲。花やあらぬ初桜の。祇園林下川原。南をはるかに眺むれば。大悲擁護の薄霞。熊野権現の移ります。御名も同じ今熊野。稻荷の山の薄紅葉の。青かりし葉の秋。また花の春は清水の。ただ頼め頼もしき。春も千々の花ざかり。

## 猩々（しょうじょう）

---

【分 類】五番目物（祝言物） \*中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：猩々（面・猩々）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

親孝行で評判の高い高風という男が、揚子の市で酒を売ると富貴の身になるという夢を見、そのお告げのとおり酒を売って金持ちになりました。その高風の店に来て酒を飲む者で、いくら飲んでも顔色が変わらない者がいるので、ある日、名を尋ねると海中に住む猩々だと明かして帰って行きました。そこで、高風はある月の美しい夜に潯陽の江のほとりに酒壺を置き、猩々の出てくるのを待つことにします。やがて、猩々は薬の水とも菊の水とも呼ばれる銘酒の味をみたい、よき友と会うことを楽しみに、波間から浮かび出て、高風と酒を酌み交わします。折から空には月も星もくまなく輝き、岸辺の芦の葉は風に吹かれて笛の音を奏で、波の音は鼓の調べのように響きます。この天然の音楽にのって、猩々は舞い出します。そして高風の素直な心を賞し、汲めども尽きぬ酒壺を与え、消えていきます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

よも尽きじ。よも尽きじ。万代までの竹の葉の酒。汲めども尽きず。飲めども変わらぬ秋の夜の盃。影も傾むく入江にかれ立つ。足元はよろよろと。酔に伏したる枕の夢の。醒むると思えば泉はそのまま。尽きせぬ宿こそ。めでたけれ。

## 清経（きよつね）

---

【分類】二番目物（修羅物＝公達物）

【作者】世阿弥

【主人公】シテ：平清経（面・中将）

【あらすじ】（仕舞 [キリ] の部分…下線部）

平清経の家臣、淡津三郎はひそかに一人で九州から都へ戻って来ます。清経は、平家一門と共に幼帝を奉じて都落ちし、西国へと逃れますが、敗戦につぐ敗戦に、前途を絶望して、豊前国（福岡県）柳ヶ浦で、船から身を投げて果ててしまいます。三郎は、その形見の黒髪を、清経の妻に届けるために、戻って来たのです。その話を聞いた妻は、せめて討ち死にするか病死ならともかく、自分を残して自殺するとは、あんまりだと嘆き悲しみます。そして形見の黒髪も見るに忍びず、涙ながらに床につくと、夢の中に清経の霊が現れ、妻に呼びかけます。妻は嬉しくもあるが、再び生きて姿を見せてくれなかったことを恨みます。清経は、都を落ちた平家一門が、筑紫での戦にも敗れ、願をかけた宇佐八幡の神からも見放されたいきさつ、敗戦の恐ろしさ、不安、心細さを話して聞かせ、望みを失って月の美しい夜ふけ、西海の船上で横笛を吹き、今様を謡って入水したことを物語って、妻を納得させようとしています。続いて修羅道の苦しみを見せますが、実は入水に際して十念を唱えた功德で成仏し得たと述べ、消えてゆきます。

【詞章】（仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

さて、修羅道に落ちこちの。さて修羅道におちこちの。立つ木は敵雨は矢先。月は清剣山は鉄城。雲の旗手をついて。驕慢の剣をそろえて。じゃけんのまなこの光。愛欲とんいちつうげん道場。無明も法性も。乱るるかたき。打つは波引くほうしお。これまでなりやまことは最後の十念乱れぬみ法の舟に。頼みしままに疑いもなく。げにも心は清経が。げにも心は清経が。仏果を得しこそ有難けれ。

## 室君（むろぎみ）

---

【分 類】四番目物（夜神楽物・略初番目物） ＊神楽、中ノ舞

【作 者】不詳

【主人公】シテ：韋提希夫人（面・増女）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

播州（兵庫県）室明神の神職が神事を執り行おうと、室津の遊女たちを神前に集ま  
らせたところ、室君達は梅の香が匂う春の夜の興趣を歌いつつ、船に乗ってやって  
来ます。神職の命により、棹の歌を歌い、神楽を奏していると、室明神が女体の姿  
で現れます。そして、感涙に袖をぬらしていると、夜も明けはじめ、明神は空高く  
昇っていくのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

玉のかんざし羅綾のたもと。玉のかんざし羅綾のたもと。風にたなびき瑞雲に乗り。  
所は室の。海なれや。山はのぼりて上求菩提の機をすすめ。海はくだりて下化衆生  
の相を現し五濁の水も。実相無漏の大海となつて。花降り異香薫じつつ。相好まこ  
とに肝に銘じ。感涙袖をうるほせば。はや明けゆくや春の夜の。はや明け方の雲に  
のりて。虚空にあがらせ。給いけり。

## 桜川（さくらがわ）

---

【分類】四番目物（狂女物） ＊イロエ

【主人公】前シテ：桜子の母（面・曲見）、後シテ：桜子の母（面・曲見）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（クセの部分…下線部）

九州日向国（宮崎県）、桜の馬場の西に、母ひとり子ひとりの貧しい家がありました。その家の子、桜子は、東国方の人商人にわが身を売り、その代金と手紙を母に渡してくれと頼み、国を出ます。人商人が届けた手紙から桜子の身売りを知った母は、悲しみに心を乱し、氏神の木華開耶姫に我が子の無事を祈り、桜子の行方を尋ねる旅に出ます。

<中入>

それから三年がたち、遠く常陸国（茨城県）の桜川はちょうど桜の季節です。桜子は磯辺寺に弟子入りしており、今日は師僧に誘われて、近隣の花の名所の桜川に花見にやって来ます。里人は、桜川の川面に散る花びらをすくって狂う女がいるから、この稚児に見せるとよいとすすめます。呼び出された狂女は、九州からはるばるこの東国まで、我が子を探してやって来たことを語り、失った子の名前も桜子、この川の名も桜川、何か因縁があるのだろうが、どうして春なのに我が子の桜子は咲き出でぬかと嘆きます。さらに桜を信仰する謂れや我が子の名前の由来、桜を詠じた歌などを語り、落花に誘われるように、桜子への思いを募らせて狂乱の極みとなります。僧は、これこそ稚児の母であると悟り、母子を引き合わせます。母は正気に戻って嬉し涙を流し、親子は連れ立って帰国します。

【詞章】（クセの部分の抜粋）

げにや年を経て。花の鏡となる水は。散りかかるをや。曇るというらん。まこと散りぬれば。のちは茶になる花と。思い知る身もさていかに。われも夢なるを。花のみと見るぞはかなき。されば梢より。あだに散りぬる花なれば。落ちて水の哀れとは。いさ白波の花にのみ。馴れしも今は先立たぬ。悔の八千度百千鳥。花に慣れ行くあだし身は。はかなきほどに羨まれて。霞を哀れみ。露を悲しめる心なり。さるにても。名にのみ聞きてはるばると。思い渡りし桜川の。波かけて常陸帯の。かごとばかりに散る花を。あだになさじと水をせき雪をたたえて浮き波の。花のしがらみかけまくも。かたじけなしやこれとても。木花耶姫の。ご神木の花なれば。風もよぎて吹け。水も影を濁すなど。袂をひたし。裳裾をしおらかして。花によるべの水。せきとめて桜川に。なそうよ。

## 紅葉狩（もみじがり）

---

【分類】 五番目物（鬼畜物） \*中ノ舞（途中から急ノ舞、序ノ舞にも）

【主人公】 前シテ：上臈（面・増女）、後シテ：鬼女（面・般若）

【作者】 観世小次郎信光

【あらすじ】（今回の連吟の部分…下線部）

秋も半ばの頃、所は信濃国(長野県)戸隠山へ、とある上臈が、数人の侍女を連れて、紅葉狩にやって来て、山陰で酒宴を始めます。そこへ、鹿狩りに来た平維茂とその従者が通りかかります。そして、この山中での人影を不審に思い、従者に名を尋ねさせにやります。女達は、名を名乗りませんが、身分の高い女性の忍び遊びだという事です。維茂は、その興を妨げないようにと、馬から降り、道を替えて通りすぎようとしています。すると女達は、その心づかいにかえって感心し、維茂を引き留め、酒宴を共にするように誘います。維茂は断りかね、勧めに応じて盃を重ね、美女の舞う見事な舞に見とれます。いつしか酔がまわって、維茂は寝入ってしまいます。女達はそれを見届けると、鬼の本性を現わし、「目を覚ますな」といいすてて、山中に姿を消します。

<中入>

すると八幡宮の末社の神が、維茂の前に現われ、神剣を授け、鬼神を退治するように神勅を伝えます。目を覚ました維茂は、神剣を押しいただき、身支度をして待ち構えます。やがて山中に稲妻が光り、雷鳴がとどろいて騒然となります。そして、本性を現わした鬼女が襲いかかって来ます。維茂は刀を抜いて応戦し、激しい格闘の末、ついに鬼女を斬り伏せます。その威勢は真に立派なものでした。

【詞章】（今回の連吟の部分の抜粋）

さなきだに人心。乱るるふしは竹の葉の。露ばかりだに受けじとは思いかども杯に。向えば変わる心かな。されば仏も戒の。道はさまぎま多けれど。ことに飲酒を破りなば。邪淫妄語ももろともに。乱心の花かずら。かかる姿はまた世にも。たぐい嵐の山桜。よその見る目もいかならん。よしや思えばこれとても。前世のちぎり浅からぬ。深き情の色見えて。かかる折しも道の辺の。草葉の露のかごとをも。かけてぞ頼む行くすえを。契るもはかなうちつけに。人の心は白雲の。立ちわづらえる。景色かな。かくて時刻も移り行く雲に嵐の声すなり。散るか正木の葛城の。神の契りの夜かけて。月の杯さす袖も。雪をめぐらす袂かな。たえず紅葉。たえず紅葉。青苔の地。たえず紅葉。青苔の地。またこれ涼風暮れゆく空に。雨うちそそぐ夜嵐の。ものすさまじき山陰に月待つほどのうたた寝に。片敷く袖も露深し。夢ばし覚ましたもうなよ。夢ばし覚まし。たもうなよ。

## 淡路（あわじ）

---

【分類】 初番目物（脇能＝男神物） ＊急ノ舞

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：老翁（面・尉面）、後シテ：伊弉那岐神（面・大天神）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

今上の帝に仕える大臣と従者が住吉・玉島の社へ参詣した後、淡路の国に古跡見物に立ち寄ります。淡路国ではちょうど、苗代づくりの季節なので、水田の取水口にいくつもの御幣が立ててある。農作業に御幣とは、さてはここは神田かと、大臣が作業をしている老人に理由を問うと、老人は「谷水を五十串立て、苗代小田の田ねまきにけり」という和歌を口にし、二の宮の神田である旨を伝えます。そこで大臣は「ここが二の宮なら、一の宮はゆず葉権現か」と再び問います。老人はそれに対して、大臣の考え違いを指摘し、二の宮とは神社の社格を表わすのではなく、イザナギ・イザナミの二神と一緒に祀っているために付いた名称でだと説明します。そして、イザナギには万物の種を蒔く意味があり、イザナミにはその収穫を収めるという意味があるので、当地は今日でも、豊かな実りに恵まれた土地となっているのだといいます。そして、イザナギとイザナミによる国生み神話を物語ります。話が終わると、老人は「神代の天の浮橋の様子を見せよう」と大臣たちに告げ、「烏羽玉のわが黒髪も乱れずに、結び定めよ小夜の手枕」という和歌を残して、天上に消えてしまいます。

<中入>

その夜、春の月夜を眺めている大臣たちの耳に神楽の音が聞こえ、目の前に光がさしたかと思うと、伊弉那岐（イザナギ）が現われます。そして、天神七代地神五代を経て今の御世に至るまで「風は吹けども山は動かず」と、天下泰平を喜び、さまざま神遊びを繰り返した後、わが国が幾久しく栄えることを約束するのでした。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

ふり下げし鉾の滴り露凝りて。一島となりしを。淡路よと見つけし。ここぞ浮橋の下ならん。げにこの島の有様。東西は海まんまんとして。南北に雲峰をつらね。宮殿にかかる浮き橋を。立ち渡り舞う雲の袖。さすは御鉾の手風なり引くは。潮の時つ風。治まるは波の芦原の。国富み民も豊かに。万歳を謡う春の声。千秋の秋津洲。治まる国ぞ久しき。治まる国ぞ久しき。

## 西行桜（さいぎょうざくら）

---

【分類】 三番目物（鬘物＝精天仙物） ＊序ノ舞

【作者】 世阿弥

【主人公】 シテ：老桜の精（面・石王尉）

【あらすじ】（仕舞〔クセ〕の部分…下線部）

京都西山にある西行の庵室には、老木の桜が今は盛りと咲いています。西行は、一人心静かに花を楽しもうと、今年は花見禁制にする由を能力に伝え、その事を触れさせます。そこへ、ここかしこと花の名所を訪ねて、春の日を送っている下京辺の人々が、西行の庵の桜が盛りと聞いて、やって来ます。西行は煩わしくは思いますが、花を愛する気持ちを汲んで断りかね、柴垣の戸を開けて一行を請じ入れます。しかし浮世を離れて花を眺めたいと思っている西行にとっては、俗の花見客が大勢やって来るのは、やはり迷惑です。そして思わず、「花見んと 群れつつ人の 来るのみぞ あたら桜の 咎にはありける」を口ずさみますが、花見の人達と共に花を愛で仮寝をします。

その夜、西行の夢の中に、老木から白髪のお翁が現れて、西行の先刻の歌の心を問いただし、桜は非情無心の草木であるから、浮世の咎はないのだと言います。そして自分は桜の精だと名乗り、歌仙西行に逢えたことを喜び、名所の桜を讃えて舞を舞い、春の夜を楽しみますが、やがて夜が明けると、老桜の精は別れを告げて消え失せ、西行の夢も覚めます。あたりは一面に敷き詰めたように落花が散り、人影もありません。

【詞章】（仕舞〔クセ〕の部分の抜粋）

見渡せば。柳桜をこきまぜて。都は春の錦。さんらんたり。千本の桜を植え置きその色。所の名に見する。千本の花ざかり。雲路や雪に残るらん。毘沙門堂の花ざかり。四王天の栄花も。これにはいかで勝るべき。上なる黒谷下川原。むかし遍昭僧正の。浮世をいとし華頂山。鶯のみ山の花の色。枯れにし鶴の林まで。思い知られてあわれなり。清水寺の地主の花。松吹く風の音羽山。ここはまた嵐山。戸無瀬に落つる。滝つ波までも。花は大井川。井堰に雪や。かかるらん。

## 竜田（たつた）

---

【分類】四番目物（夜神楽物＝略初番目物） ＊神楽

【作者】金春禅竹

【主人公】前シテ：巫女（面・増女）、後シテ：竜田姫の神霊（面・増女）

【あらすじ】（仕舞〔キリ〕の部分…下線部）

日本六十余州の神社仏閣に納経を志す廻国の僧が、奈良の社寺を拝し終え、続いて河内国（大阪府）へと急いでいます。途中、竜田明神に参詣のため、竜田川を渡ろうとすると、一人の巫女が現れ、「竜田川 紅葉乱れて 流るめり 渡らば錦 中や絶えなん」という古歌をひいて止めます。僧が、それは秋のことで、今はもう薄氷が張っている頃なのにと言うと、巫女は更に「竜田川 紅葉を閉づる 薄氷 渡らばそれも 中や絶えなん」という歌もあると答え、別の道から社前に案内します。そして、霜枯れの季節にまだ紅葉しているのを不審に思う僧に、紅葉が神木であることを語ります。さらに竜田山の宮廻りをするうちに、巫女は、自分は竜田姫の神霊であると名乗って社殿の中へ姿を消してしまいます。

<中入>

その夜、僧が社前で通夜をしていると、竜田姫の神霊が現れて、明神の縁起を語り、あたりの風景を賞美したあと、神楽を奏して、虚空へと上っていきます。

【詞章】（仕舞〔キリ〕の部分の抜粋）

ひさかたの。月も落ちくる。滝まつり。波の。竜田の。神のみ前に。神のみ前に。  
散るはもみじ葉。すなわち神の幣。竜田の山陰の。時雨降る音は。さっさっの鈴の  
声。立つや川波は。それぞ白木綿。神風松風吹き乱れ吹き乱れ。もみじ葉散り飛ぶ  
木綿附鳥の。み被も幣も。ひるがえる小忌衣。謹上再拝再拝再拝と。山河草木国土  
治まりて。神はあがらせ。たまいけり。

## 錦木（にしきぎ）

---

【分類】四番目物（執心男物） \*男舞

【主人公】前シテ：男（直面）、後シテ：男の亡霊（面・怪士）

【作者】世阿弥

【あらすじ】（今回の仕舞 [キリ] の部分…下線部）

諸国一見の僧が、従僧と共に陸奥国狭夫の里（青森県）にやって来ます。そこへ錦木を手にした里の男と細布を持った女が現れて、恋の思いを懐かしんで語ります。僧が二人の売り物を不審に思い、その謂れを尋ねると、二人は名物についての歌物語を語ります。さらに僧が詳しい話を所望すると、男が、この地方には、恋した女の家の門に錦木を立て、女がその錦木を家に取り入れれば、男の思いがかなったしるしという風習があるが、3年間錦木を立てるために女の家に通ったものの、思いを遂げることなく死んだ男の塚があり、それが錦塚と呼ばれていると話します。そして、二人で僧をその塚に案内し、塚の中に消えてしまいます。

<中入>

僧は里の者に錦塚の謂れを聞き、塚の前で仏事を始めます。すると、女の亡霊が現れて、僧の読経を感謝します。続いて、男の亡霊も塚の中から感謝の言葉を述べ、僧の前に姿を現します。塚の中で昔が再現され、男の亡霊は、機を織る女に3年間錦木を立て続けた恋の苦悩を物語ります。女の亡霊が、今度は男の求婚を受け入れます。男の亡霊は喜びの舞を舞います。朝になると、野中に塚があるだけでした。

【詞章】（今回の仕舞 [キリ] の部分の抜粋）

舞を舞い。舞を舞い。歌をうとうも妹背のなかだち。立つるは錦木。織るは。細布の。とりどりさまさまの夜遊の盃に。映りて有明の影。恥ずかしや恥ずかしや。あさまにやなりなん。覚めぬさきこそ夢人なるもの。覚めなば錦木も細布も。夢も破れて松風さっさったるあしたのはら。野中の塚とぞ。なりにける。

## 岩船（いわふね）

---

【分類】 初番目物（脇能＝荒神物）

【作者】 不詳

【主人公】 前シテ：童子（面・童子）、後シテ：龍神（面・黒髭（泥小飛出））

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

時の帝が摂津国（大阪府）住吉の浦に、新たに浜の市を開き、高麗や唐土の宝物を買い取るようにとの宣旨を下されます。そこで、命を受けた勅使が住吉へ下向します。すると、そこへ姿は唐人ながら、日本語を話す一人の童子が、銀盤に宝珠を乗せて現れます。勅使が不審に思って問いかけると、童子はめでたい御代を寿いで来た<sup>と</sup>告げ、また、この宝珠も君に捧げたい、龍女の珠とでも思っていた<sup>だけ</sup>ればありがたい<sup>と</sup>言います。そして、住吉の浜に立ついろいろな市のことなどを語ります。また、このあたりの景色をめで、さらに天がこのめでたい代をたたえて、極楽の宝物を降らすために、岩船に積み、今、ここへ漕ぎ寄せるところだ<sup>と</sup>言います。そして、自分こそは、その岩船を漕ぐ天ノ探女であると明かして消え失せます。

<中入>

続いて、海中に住む龍神が、宝を積んだ岩船を守護するために現れます。そして、龍神は八大龍王達も呼び寄せ、力を合わせて岩船の綱手を引き寄せ、住吉の岸に無事に到着させます。山のように積まれた金銀珠玉は、御代の栄を寿ぐように光輝きます。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

宝をよする波の鼓。拍子を揃えてえいやえいや。えいさらえいさ。引けや岩船。天の探女か。波の腰鼓。ていとうの拍子を。打つなりやさざら波。えめぐりめぐりて。住吉の松の風。吹き寄せやえいさ。えいさらえいさと。押すや唐簾の。押すや唐簾の潮も満ち来る。波にのって。八大龍王は。海上に飛行し。御船の綱手を手に繰りからまき。潮に引かれ。波にのって。長居もめでたき住吉の岸に。宝の御船を着け納め。数も数万の捧げ物。運び出だすや心のごとく。金銀珠玉は降り満ちて。山のごとくに津守の浦の。君を守りの神は千代まで。栄うる御代とぞ。なりにける。

## 小袖曾我（こそでそが）

---

【分類】 四番目物（現在物） \*男舞

【作者】 不詳

【主人公】 シテ：曾我十郎祐成（直面）

【あらすじ】（仕舞の部分…下線部）

曾我十郎と五郎の兄弟は、源頼朝が富士の裾野で巻狩を行うので、この機会に親の敵工藤祐経を討とうと決心します。そうして、それとなく暇乞いをするため、また、五郎の勘当の許しも得ておこうと、母のもとを訪れます。まず、十郎が案内を求めると、母は喜んで迎え入れますが、五郎には出家になれという母の命にそむいたというので怒って会おうとしません。十郎はこのたび兄弟そろって御狩に出ようとしたのに、弟を許してくださらないのは、私の身をも思ってくださいらないことになるのです。また、五郎は箱根にいた間母上のことを思い、亡き父の回向に心を尽くしていたのですと、いろいろと弟のためにとりなし、母に怨みを述べて、弟と共に立ち去ろうとします。すると兄弟の心が通じ、母もようやく五郎の勘当を許します。二人は喜びの酒を酌み交わし、共に立って舞い、これが親子最後の対面かと名残もつきませんが、狩場に遅れてはならぬと、母に別れのあいさつをして、勇んで出立します。

【詞章】（仕舞の部分の抜粋）

舞のかざしのその隙に。舞のかざしのその隙に。兄弟目をひき。これや限りの親子の契りと。思えば涙も尽きせぬ名残。牡鹿の狩場に遅参やあらんと。暇申して帰る山の。富士野の御狩の折を得て。年来の敵。本望を遂げんと。互に思う瞋恚の焰。胸の煙を富士おろしに。晴らして月を清見が関に。終にはその名をとめなば兄弟。親孝行の。ためしにならん。嬉しきよ。

## 能のミニ知識

### ★能の分類

**五番立て**…能の催しは、一日に五番(五曲)が正式とされています。異なる雰囲気のものを実効果的に組み合わせるノウハウとして、神(神がシテ)・男(修羅に苦しむ男性がシテ)・女(美しい女性がシテ)・狂(狂女などがシテ)・鬼(鬼畜がシテ)の順に演じます。ただし、鬼がシテ(五番目物)であっても内容がめでたいため初番目に演じられる場合がある(略脇能物)など、完全に固定されているわけではありません。

#### ○初番目物(脇能)

江戸時代の正式の演能では「翁」につづいて行われた能です。

神を主人公として、神社の縁起や神威を説き、国の繁栄を予祝し聖代を寿ぐ内容で、演劇性よりは祭祀性の強い作品です。

#### ○二番目物(修羅能)

仏教では、戦にたずさわった者は修羅道に堕ちて苦しむといわれます。シテ(主に源平の武将の亡霊)が、旅僧の前に現われ、合戦の様子を見せ、死後の責苦を訴え、回向を願う作品です。

#### ○三番目物(鬘[かづら]物)

シテ(『源氏物語』など王朝文芸のヒロインや歴史上の美女、植物の精など)が、ありし日の恋物語などを回想し静かに舞を舞うという構成です。

全般に演劇性よりも舞踊性・音楽性が強く、能の理想美である幽玄の風情を追求した作品が多いです。

#### ○四番目物(雑能)

他の分類に属さない能が、ここに集められています。

男女の「物狂物」、史上の武士を主人公とした「現在物」、非業に死んだ人の「執心・怨霊物」、中国人をシテとした「唐物」など、そのスタイルは多様です。また、他の分類に比べてストーリー性・演劇性が強い作品が多いです。

#### ○五番目物(切[きり]能)

一日の番組の最後に置かれる能です。「ピン(一番)からキリ(最後)まで」のキリです。

見た目に派手でスペクタクル性の強いものが多いため、フィナーレとして演じられます。人間以外の「鬼畜や鬼神」の能、「竜神・天狗」の能、猩々・獅子・山姥など「精霊」の類や「貴人」の早舞物などがあります。

### ★能の楽器

**囃子方**[はやしかた]…能の楽器は、笛、小鼓、大鼓、太鼓の4種類です。

この楽器を演奏する人を囃子方といいます。

**笛(能管)**:竹製、指穴七つの横笛です。唯一のメロディ楽器です。

**小鼓**:左手で右肩にかついで、右手で打ちます。

**大鼓**:左手で左膝にのせ、右手で打ちます。

**太鼓**:台に据えて、二本のバチで打ちます。

## ★略式の演能

### 素謡[すうたい]

一人または数人の謡によって能一番を聞かせるもの。演者は紋付袴姿で、シテ・ツレ・ワキ・地謡などに分かれて謡う。

江戸時代に入って一般に普及した上演形態。

### 独吟[どくぎん]

謡の「聞かせどころ」を独演するもの。演者は紋付袴姿。

### 連吟[れんぎん]

謡の「聞かせどころ」を複数で披露するもの。演者は紋付袴姿。

### 仕舞[しまい]

能一曲のうち、クセやキリなどのシテの所作の「見せどころ」だけを舞う(通常 5 分程度)。シテは装束や面をつけず紋付袴姿で地謡(ボーカル)だけをバックにして舞う。仕舞扇を用いるが、小道具、作り物(大道具)は原則として用いない。シテ一人で演じるのが普通だが、特殊なものにシテとツレ、シテとワキ、ワキ一人、ツレと子方で演じるものもある。

鑑賞芸としての仕舞は、江戸初期になって成立したとされる。

### 舞囃子[まいばやし]

舞事・働事(囃子の演奏に支えられた能の中の一番の「見せどころ」)を中心に、シテが地謡と囃子(器楽)をバックにして装束や面をつけずに舞うもの。平均して 10~20 分程度の長さになる。長刀や杖などの手道具は用いるが、作り物(大道具)は省略する。

舞囃子は江戸初期に少しずつ上演される形式となったが、徳川五代将軍綱吉が愛好し、自身も舞ったことから元禄期に盛んになったとされている。

### 袴能[はかまのう]

面・装束を用いず、紋付袴姿で能を演じるもの。

### 半能[はんのう]

前場の大半を省略し、見せ場である後場を主体に演ずるもの。

### 独調[どくちょう]、独鼓[どっこ]、一調[いっちょう]

謡の「聞かせどころ」を、謡と小鼓・大鼓・太鼓の奏者それぞれ一人ずつで競演するもの。

### 一管[いっかん]

笛の「聞かせどころ」を独奏するもの。

### 一調一管[いっちょういっかん]

打楽器のうち一種類と笛の二重奏の場合と、謡を加えて三人で競演する場合がある。

### 素囃子[すばやし]

舞事・働事などの部分を、囃子(楽器)によって聞かせるもの。

### 番囃子[ばんばやし]

謡と囃子(音楽的要素)のみで、能一番を聞かせるもの。

## ★舞事と働事

舞事[まいごと]…抽象的な純粹舞踊。音楽にも所作にも表意性はありません。

○序ノ舞: ゆったりとして、静かで典雅な舞です。美女の霊、女体・老体の精、貴公子の霊などが舞います。

○真ノ序ノ舞: 老体の神の荘重な舞

○中ノ舞: 基本的な舞で、テンポは中ぐらいです。主に現身の女性が舞いますが、女体の神・精仙、遊狂僧の場合もあります。

○早舞: 拍子にリズムがあり、ノリのいい舞です。テンポは中ノ舞と神舞の間ぐらいです。貴人や成仏した女性などがすがすがしく、典雅に舞います。

○神舞: 若い男体の神がテンポも早く、颯爽と舞う舞です。

○男舞: 直面の現身の男(武士が多い)が舞う舞です。喜びや祝いの気持ちを表現して、速いテンポで勇壮闊達に舞います。

○急ノ舞: テンポの速い、激しい舞です。鬼の化身やあらぶる神などが主に舞います。

○破ノ舞: 序ノ舞や中ノ舞の後に舞い添えられる短い舞です。

「舞事」の中でも、序ノ舞から急ノ舞に至る「舞ノ類」は、どれも旋律はほとんど同じです。急ノ舞に至るに従ってテンポが次第に早くなり、それに伴ってリズムが単純化する程度の違いしかありません。

これに対して次のものは、それぞれ固有の旋律を持っています。

○神楽: 「女体の神や神がかりした巫女」が幣を持って舞う舞です。

雅な感じの舞です

○楽[がく]: 舞楽のような感じの舞です。

中国の皇帝や童子などが舞う「異国風」の舞です。

○羯鼓[かっこ]: 羯鼓とは、腹につけてバチで打つ楽器のこと。

「遊芸者」がこの楽器を演奏しながら舞う様を模した舞です。

働事[はたらきごと]…「舞事」が抽象的な形式舞踊であるのに対し、「働事」は、ある程度表意的な所作をします。

○イロエ: 囃子に合わせて舞台を一巡する舞踊的な所作のことです。

○カケリ: 「修羅道の苦しみや物狂い、不安」などを表す所作のことです。

精神的な興奮状態、心の動揺や苦痛を表現します。

○祈り: 鬼女、悪霊が山伏や僧に祈り伏せられるというものです。

「祈祷と抵抗の一進一退」が表現されます。

○舞働[まいばたらき]: 龍神、鬼神、天狗、妖怪などが「威力を誇示」して猛々しく演ずる豪壮活発なる所作のことです。

働[はたらき]ともいいます。

このリーフレットの内容は、名古屋春栄会のホームページにも掲載しています。

<http://www.syuneikai.net>